鉄スクラップ切断機更新

平林金属 港工場

リサイクル業の平林金属（岡山市北区下中野）は、スクラップ解体業務を担う港工場（同市中区新築港）で、鉄骨やH形鋼を切断する大型装置を更新した。資源の再利用などを狙いに鉄スクラップの需要が伸びる中、鋼材の切り分け作業を効率化して処理量を増やし販売拡大につなげる。総投資額は約２億3000万円。

（橋本直樹）

需要増、作業効率化

新たな切断機は、長さ2㍍の刃に最大1250㌧の圧力をかけて廃材を切り分ける装置。解体現場から持ち込まれる鋼材や塊になった鉄骨などを処理する。本体は幅約4㍍、奥行き約13㍍、高さ約9㍍で、長さ10㍍程度の鋼材まで対応している。8月に導入した。

新型機は、切り分けるスクラップの大きさを高精度で調整できるようになるとともに、作業データを管理することで装置のオペレーターごとにばらつきがあった1回当たりの処理量を最適化し、無駄を省ける。1996年から使っていた旧型機は、切り残しが発生していたためバーナーで焼き切るといった手作業での処理が必要だったほか、メンテナンスの頻度も増えていたといい、更新によって作業負担を軽減できる。

1カ月当たりの処理量は、将来的に従来の1・5倍となる3千㌧超へ引き上げる目標を掲げる。

鉄スクラップはこれまで、電炉で溶かして製鋼する特殊鋼メーカーが主な取引先だったが、環境負荷の低減や資源の再利用に向け、高炉を使う大手鉄鋼メーカーでも鉄鉱石にスクラップを混ぜることで二酸化炭素の排出抑制につながるとして引き合いが増えている。

平林金属は「新たな装置の導入で、顧客のニーズに応じた品質のスクラップ供給が可能になる。データを上手に活用し、経験の浅い中堅や若手の配置にもつなげていきたい」としている。

同社は1956年創業、60年設立、資本金9980万円、グループの売上高259億4400万円（2024年12月期）、従業員数525人。

港工場に導入した鉄スクラップの大型切断機

2025年9月12日(金)山陽新聞朝刊